夢と歴史性——デリダ『グラマトロジーについて』における ルソーの「欲望」読解

森脇 透青

Le rêve et l'historicité : la lecture du « désir » de Rousseau dans *De la grammatologie*

MORIWAKI Tosei

La tâche de notre article est de préciser un aspect de l'objectif de la deuxième partie de *De la grammatologie* (1967), intitulée « Nature, Culture et Écriture ». Ici, Derrida remarque l'œuvre relativement mineure de Rousseau, *Essai sur l'Origine des Langues*, et développe une discussion détaillée du statut de l'écriture dans la théorie du langage de Rousseau. La question de la structure de cette deuxième partie, et de l'inévitabilité du choix de Rousseau comme « exemplaire » du projet de déconstruction, n'a pas été explicitement discutée. Dans cet article, nous discutons de cette question, en prêtant attention à la lecture que Derrida fait de Rousseau en perspective du « désir », et en considérant l'influence de sa lecture antérieure de Rousseau.

En croisant la psychanalyse et la lecture historique, Derrida en vient à comprendre le désir de Rousseau comme un problème historique. Selon Derrida, le rêve de Rousseau est, d'une part, inhérent à l'histoire de la métaphysique, mais, d'autre part, il trahit cette histoire de la métaphysique. Ainsi, en lisant doublement Rousseau comme exemple, Derrida a pu concevoir sa propre « histoire des idées ».

はじめに

本稿はジャック・デリダの著作『グラマトロジーについて』（1967、以下『グラマトロジー』とする）の第二部「自然、文化、エクリチュール」におけるデリダの企図を可視化することを目的としている。第二部でデリダは、第一部で頻繁に言及される存在の哲学者たち（プラトン、ヘーゲル、ニーチェ、フッサール、ハイデガーら）ではなく、十八世紀フランスの思想家ジャン＝ジャック・ルソーの比較的マイナーな著作『言語起源論』（1781）にフォーカスし、ルソーの言語論におけるエクリチュールの地位をめぐって詳細な議論を展開する。ここでデリダはロゴス中心主義の歴史を代表しつつそれを裏切る内的な切断の局面として「ルソーの時代」を解釈する。

第一部「文字以前のエクリチュール」は、従来、デリダ自身によって与えられた「理論的原型（マトリクス）」（DG, 7）という地位に即して、「脱構築」を理解するための重要な資料とみなされてきた。一方、第二部はポール・ド・マンが着目したこともあって知られてはいるが、脱構築のプロジェクトにとってルソーという「範例」の選択にいかなる必然性があるのか、という構成の問題は（第二部は、第一部の倍以上の紙幅が費やされるにもかかわらず）これまで明確に論じられてこなかった[1]。実際、『グラマトロジー』は同時期に手がけられた二つの論考が一冊としてまとめられ加筆修正されたものであり、第一部と第二部の連関は必ずしも明確でない[2]。本稿ではこの問題を、デリダにおけるルソー読解方法という観点から、さらに先行するルソー読解との影響関係から論じることで、デリダにとっての「ルソー」という固有名が持つ意義（『グラマトロジー』第二部の必然性）を明らかにする。なお、デリダのいう「ルソーの時代」の具体的な詳細もまたデリダの思想史理解を検討する上で重要だが、別稿で論じることとし、本稿では詳述しない。

１． 欲望という論点

『言語起源論』というテクストの選択からもすでに自明であるように、デリダは「言語」の観点からルソーを読んでいる。このことは『グラマトロジー』刊行後に発表された「ジュネーヴの言語学サークル」（1968 年初出、『哲学の余白』所収）でさらに端的に示されているが、デリダはルソーをソシュール言語学の先駆者とみなし、その類比関係からソシュール（以降）の言語学に残存する音声中心主義の残滓が考察される。

こうした一連の議論は構造主義的思潮に対する介入として展開されているという側面も強く、当時のフランス思想界の状況において「ルソー」という固有名が持っていた意義が考慮されねばならないのは確かである（とりわけ 1959 年から開始されたプレイヤード版ルソー全集公刊の影響や、さらには「68 年 5 月」に象徴される時代の趨勢において、しばしばルソーに帰される直接民主主義への希求など）。しかし、『グラマトロジー』のルソー読解は、同時代的状況への牽制に収まるものでも、また狭義の「言語論」に収まるものでもない。デ

リダはルソーの言語論読解から出発して、ルソーが様々な仕方で変奏する「自然」と「社会」の二項対立――「パロール／エクリチュール」、「情念／欲求」、「メロディ／ハーモニー」、「南方／北方」、「アクセント／分節化」――そのものの解体を狙っているからである。こうした二項対立の複雑な「絡み合い（complication）」を示すため、デリダはルソーの著作群を絶えず参照しており、デリダの読解は決して「言語学者ルソー」にのみ向けられているわけではない。実際、「代補」という決定的な概念が引き出されるのは、『言語起源論』の読解（第二部第三章）に入る直前の議論（第二部第二章）であり、ここでデリダは『エミール』、『告白』、『夢想』など、ルソーの主要著作群を参照している。

このようなデリダのルソー読解は言語の問題のみならず、欲望の論点から検討されるべきであるように思われる。この点は、ジャン・スタロバンスキーの高名なルソー論『透明と障害』（1957）を考慮することで明確になるだろう。先行する数多くのルソー論を参照するデリダの議論においても、スタロバンスキーからの影響は特権的かつ一貫したものである。

スタロバンスキーは、外部の規範や問題設定をテクストに課す読解を批判し、テクストの内部にとどまり、その秩序を明らかにする「内的批評」を試みている。これによってルソーのテクスト内に（さらに複数のテクスト間に）しばしば見出される矛盾が、透明と障害という一貫するモチーフのうちに再読され、有機的に結びつけられる。スタロバンスキーが発見するのは、ルソーの著作に内在する「透明」なコミュニケーションへの欲望――存在と仮象、内部と外部、自己と他者が媒介物なしに一致し、交流することへの欲望――である。

ルソーは認識と事物が直接に一致すること、「水晶のように透明な」自身の純潔が他人によって承認されることを望む。しかしこの希求は決して簡単に成就しない。スタロバンスキーが『透明と障害』第一章で着目するのは、幼少期のルソーが誤解され無実の罪を着せられたという、「折れた櫛」のエピソードである。この事件を通じて幼いルソーが知るのは、自他のコミュニケーションは「ヴェール」によって妨げられており、自身の内面の潔白が他者に直接的に伝わることはない、という事実である。「これが私の幼年期の平穏な生活の終わりであった。これ以来私は純粋な幸福を享受することがなくなった」（OC, I, 20）。

しかし図式がさらに込み入ったものとなるのは、「書くこと」の主題が登場する場合だろう（『透明と障害』第六章）。ルソーは基本的にはエクリチュールや人為的な記号の間接性を誤解の元凶として、つまり外的な「障害」として断罪し、パロールやアクセントの直接性と生命力に重きを置く。しかし他方でルソーは同時に生涯にわたって文章と楽譜を書き続けた著述家（écrivant）でもある。それは、ルソーが誤解を恐れつつも一方で承認を求めており、「外部の判断の妥当性に異議をとなえながらも、「注目」されていることに執着」（TO, 151）せざるをえないからである。そして誤解の危険は、何よりも他者の現前、他者との直接的な会話においてこそ生ずる。したがってルソーはフィロゾーフたちとの社交の場から逃れ、「不在となり〔ルソーの隠遁を指す〕、書くことを選ぶ」（TO, 152）ことを余儀なくされる。

ここで、書くこと自体はルソーの目的ではない。ルソーが欲望するのは誤解なき承認、自己の透明な現前である。だがそれがかなわないために、ルソーは「象徴的再我有化」（DG, 206）として、書くことを選ぶのだ。スタロバンスキー（さらにその議論を引き継ぐデリダ）の解釈において、ルソーにおける言語、文学への志向は「代補（supplément）」として理解される。言語は、欲望と充足、記号と事物、不在と現前の絶えざる不一致、直接性の不在を埋め合わせる（suppléer）のである。

２． 性的代補——破壊不可能な欲望

このように、ルソーにおけるエクリチュールの位置、ならびに「代補」概念は『透明と障害』ですでに議論の俎上に上げられていた。ここでスタロバンスキーは、ルソーにおける言語と文学が、失われた生の「透明性」を取り戻すためのノスタルジックな契機であるとみなした。ルソーはエクリチュールを一方で起源からの疎隔として断罪しながら、しかし実際には起源との合一がありえないために、他方では起源への接近ないし回帰を欲望し、その変質（altération）と疎外（aliénation）を克服するための必要悪としてエクリチュールに依存する。デリダはこのルソーの欲望の動きに着目し、「この欲望の最初の運動がひとつの言語理論として定式化される」（DG, 204）とみなす。ここで言語の問題はむしろ欲望の問題から捉えられているのである。

ルソーは「代補」という語を多用するが、デリダに先駆けてスタロバンスキーならびにプレイヤード版全集の編者たち（ガニュバンとレーモン）が指摘する（OC, I, 1409）のは『告白』における二つの用法である。『告白』における「危険な代補」とはまず自慰行為の隠語であり（OC, I, 109）、実際の性交渉の埋め合わせという意味が込められている。しかし他方、この語は別の意味作用を持ってもいる。スタロバンスキーによれば、ルソーの生涯の伴侶であったテレーズは、「ルソーが必要とする「代補」を保証している」（TO, 214）。ルソーは、本来愛するべき女性とのかなわぬ愛の埋め合わせとして、テレーズと婚姻関係を結ぶのだ。ルソー自身、テレーズに対して「わずかな恋のひらめきさえ感じたことはなかった」（OC, I, 414）が、しかし彼女に「自分に必要な代補を見出した」（OC, I, 332）と告白している。

スタロバンスキーが多くを語らなかったこの「代補」が、デリダの読解においては中心に据えられている。デリダが注意するように、代補という語彙はルソーにおいて必ずしも性的な事柄のみを意味しない。たとえば『言語起源論』第七章（『グラマトロジー』第二部第三章以降で粘り強く読解される）でルソーが論じるところによれば、文字においては発話が持つ本来のアクセント（抑揚）が失われており、その喪失されたリズムを復元するためには、アクサン記号という「代補」が必要となる。アクサン記号を付されてなお文字は本来の「自然な」アクセントには到達しないが、それでもなお文字を少しでも声に近づけ復元するために、記号という「人為」が要請されるのである。エクリチュールと自慰行為という一見全く

異なる「ふたつのケース」（DG, 235）を通じて、デリダはルソーの議論につねにこの必要悪の論理、「代補」の論理が入り込んでいることを指摘するのである。

デリダは「代補」に次のような二重の定義を与えている。代補は一方で「付加」されるものである。デリダによれば代補は、余った資材をその場で消費せず貯蓄しておくような、ある種の経済的（エコノミック）な余剰を意味する。「かくして、テクネー、像（イマージュ）、表象、慣習などは、追加分として〔en supplément〕自然＝本性から到来するのであり、こうした累積機能のすべてを豊かにする」（DG, 208）。ここで代補とは、現前の過剰であり、現前の派生物である。しかし代補は他方で、「補填」し、代わりになることによって穴埋めし、補うものでもある。ここにはむしろ現前の不在という事態があり、代補は現前にとって代わる。「代補は、〈の–代わり–に〔*à-la-place-de*〕〉介在する、あるいは入り込む。代補が度を越して与える〔combler〕とすれば、それは空隙が補填される〔combler〕ようにしてである。代補が代理し、像（イマージュ）を作り出すのは、先行する現前の欠如によってである」（同上）。

ここで、エクリチュールはこの代補の構造を示す典型的かつ特権的な「範例」であると言えるだろう。エクリチュールは一方で失われた親密な内部性を想像的に回復する補助の役割を持っており、すでに見たようにこれはルソーにとって必要悪であった。しかしエクリチュールは同時に、それ自体が内部にとって異質な他者、内部の透明性を汚染する脅威でもあり、「声」の直接性を媒介し隔たりのなかに分割してしまう。デリダがこの議論を通じて主張するのは、この代補の二重性（現前を補助して回復させつつ同時に現前を汚染して失墜させる）が必然的であり、つねにすでに生じていることである。代補は「現前の肯定性に単純に付け加わるのではない」（DG, 208）のだ。

ここでデリダはこうした代補の構造に対するルソーの否認を欲望の問題として定式化する。スタロバンスキーが取り上げた「折れた櫛」のエピソードにも見られたように、ルソーは（とりわけ『告白』では自身の）「内部」の純真・無垢をつねに主張しており、ルソーにとってその純粋さが汚染されるのは、あくまで外から偶発的にやってくる「悪＝病〔*mal*〕」による。しかし、代補の内部に対する外面性を欲望するルソーに反して、代補は内部を構成する可能性の条件であって、その意味で単純に「外的」（派生的）なものではなく、内的な外部性である。だからこそ、内部と外部とを隔てる完全な境界を打ち立て、内部の潔癖さを守ろうとする「この欲望は自身のうちに不充足の宿命を担っている」（DG, 206）。

『グラマトロジー』でデリダは、同型の図式（本来純粋なものが先立ち、偶発的な「悪」の到来によって純粋さが汚染される）をソシュールとレヴィ＝ストロースにも指摘することで、代補を外的なものとみなす欲望の系譜を浮かび上がらせている。しかし、このような「欲望」については、ルソーにおけるセクシュアリティの問題をいっそう詳細に確認しておく必要があるだろう。デリダによる「代補」概念の拡張は、スタロバンスキーや全集の編者たちも着目していたこのテーマのもとなされているからである。

性的代補すなわち自慰は、実際の性交渉の不在を想像力によって補い（他者を想像力によって現前させ）、真の享楽の現前を繰り延べする。デリダは、ルソーが終生悩まされたこの「悪癖」を、「自己触発」と結びつける。

> ルソーはこの自慰への依存を、そしてその理由での自責を決してやめないだろう。ルソーの眼には、自慰は悪徳と堕落のモデルであり続ける。他者の現前によって自己を触発することで、ひとはみずから変質する〔*s'altérer*〕。ところでルソーは、この他化〔altération〕が私の後に来るものではなく、この他化こそが私の起源そのものなのだ、と考えたくないし、またそのように考えることができない。ルソーはそれを外部から主体の無傷さを触発しに到来する偶発的な悪＝病として考えなければならない。しかし彼は、欲望する他者の現前を直接的に復元するものを放棄することができない。それは、ひとが言語を放棄しえないのと同様である。（DG, 221）

自慰行為はルソーにおいて「本来」の性交渉の代わりとして、その不在を補う悪しき補助物として捉えられる（ここでも言語の働きは欲望の運動とのアナロジーで語られている）。だが一方、そもそもルソーの性交渉への欲望は両義的である。デリダが強調しているように、ルソーは「本来」の性交渉をある種の危険として忌避しており、この際にルソーは逆にこの自慰を道徳的な行為として許容することさえある（晩年のルソーはテレーズとの性交渉を避け、自分自身にだけ害をなす——とルソー自身は認識していた——自慰を必要悪として許容する）。

こうした一連の読解でデリダが示そうとするのは、「本来」の性交渉さらには「本来」愛すべき女性へのルソーの欲望がすでに代補の連鎖に組み込まれていることである。ルソーは他者の現前を欲望しつつ、同時にその現前そのものに耐えることができず、絶えず不在へと置き換えてしまう。ルソーは、「ママン」（若きルソーの庇護者であり、ルソーが終生執着していたヴァランス夫人）が不在の時、彼女の持ち物や部屋の床に口づけをするというフェティシズムを抑えることができなかった。ルソーはいう。「私が彼女〔ヴァランス夫人〕に対する愛着の強さを感じるのは、彼女の姿が見えない時であった」（OC, I, 107）。

スタロバンスキー同様、デリダは「ある仕方でテレーズ自身がすでにひとつの代補であった」（DG, 225）と結論するが、しかしデリダによればヴァランス夫人の方もまた代補を免れてはいない。ヴァランス夫人は彼女自身、その象徴的なニックネームの通り（「ママン」）、ルソーの母親の代補だからである。「ここに代補の連鎖がある。ママンという名詞は、そのひとつをすでに指し示している」（DG, 225）。そしてルソーの実際の母親は彼の誕生の九日後に死んでおり、ルソーの意識に現前したことはない（ルソーは母親が自身を産んだせいで死んだと考えていた）。したがって、あらゆる代補の連鎖を停止させるはずの起源の地点、「真の」母親はそもそも不在であったことが明らかになる。このことは、現前性が起源からすでに想像的・象徴的なものであることを意味する。

デリダは『グラマトロジー』第二部第三章でルソーの社会論（『言語起源論』並びに『社会契約論』）における近親相姦の禁止を論じる際にも再度『告白』を引き合いに出し、「ママン」と姦通した際のルソーの感想（「あたかも私は近親相姦を犯したかのようであった」）を引用する（DG, 377）。ここでもデリダはルソーの欲望を近親相姦への欲望と結びつけるが、その欲望は、ルソーの誕生と同時にすでに禁止されていたのである。近親相姦という代補なき享楽の瞬間、差延なき現前は、欲望されはするが、つねに危険なものとして禁じられる（あるいは禁じられているからこそ欲望される）。それどころかデリダは、ルソーの記述に従いつつ、「象徴も代補もない享楽そのものは、〔……〕もしこういったものが可能だとすれば、それは死の別名でしかないだろう」（DG, 223）と結論してさえいる。代補は、この「死」としての現前そのものの経験を延期しつつ、「あたかも……かのように（comme si...）」の構造において、比喩的・虚構的・想像的に与えるのである。

デリダの見立ては、いかなる直接的で「根源的」な経験も、この〈かのように〉の構造、法の禁止と侵犯の戯れとしての代補の連鎖に組み込まれている、というものである。性交渉の「本来性」は、ある記号が絶えず別の記号によって置換されていく際限のない運動（差延）によって媒介されている。だからこそ、他者の現前としての性交渉は、「この代替の戯れと自己触発のこの象徴的経験の以前に「自ずから」欲望されることなど決してありえなかった」（DG, 221）のである。

このような代補の運動（現前のイマージュへの置き換え）こそが、デリダによれば自己と他者の起源であり、他者と出会うための条件でさえある[3]。とはいえ、デリダにおいてこの代補の構造は、現前への欲望を妨げるわけではない。むしろ、差延あるいは代補によって事物、他者、享楽、母、自然、生、存在の「そのもの」が失われたその時から、だからこそ、現前への欲望は消えることがなく生じ続ける。このように差延と欲望は表裏の関係にあり、デリダはこうした欲望を一貫して「私たちの破壊不可能な欲望」（DG, 376）、「現前と再合流したいという破壊不可能な欲望」（DG, 397）と呼ぶ（この点については後述する）。

３． 批判的読解――規制された矛盾

このようにデリダの読解はスタロバンスキーの図式を発展させたものだが、両者には微妙な差異がある。デリダにおいては、透明な起源への欲望がありその充足が代補されるのではなく、この無際限な代補の連鎖が先行し、起源への欲望を、さらには透明と障害の対立を産出するとされる[4]。だがさらに重要なのは、『グラマトロジー』全体を貫いて提起される「批判的読解の諸問題」（DG, 7）である。読解の問題とデリダのルソー読解を切り離すことはできない。デリダがスタロバンスキーを批判するのはまさに読み方そのものであって、争点となるのはここでもルソーの「欲望」である。スタロバンスキーは伝統的な批評がルソーの性的倒錯を安易な精神分析によって分析し、「心理的因果関係のかなり貧しい概念」（TO, 205）に還元することに異を唱える。デリダもまた、スタロバンスキーや全集の編者たちとこうし

た批判を共有している。とりわけデリダがテクストを外部の超越的審級（ここでは作家の現実的生や病理）によって判断する「超越的読解」（DG, 229）を斥け、「テクスト外は存在しない」（DG, 227）とする際、この近さは顕著であろう。

だがデリダの読解は、単にルソーの欲望の全体像を抽出し整合的に理解するにとどまるわけでもない。デリダはスタロバンスキーの読解を「現象学的あるいは実存的なスタイル[5]の全体的な精神分析」（DG, 219）とし、この読解はルソーの行動の全体性を特権化しすぎており、こうした全体性を構築するような亀裂や差異を見落とす危険を冒していると指摘する[6]。これに対し、デリダは絶えず書き手の欲望にさからい裏切って駆動しているものにこそ着目する。この方針は、「把握〔*prise*〕あるいは超把握＝驚愕〔*surprise*〕を厳密に考慮」（DG, 227）するものと簡潔に言い表されている。デリダによればルソーは「代補」という語をめぐって、「自分が言わんとする〔意味する〕より以上のことを、より以下のことを、あるいはそれとは別のことを〔……〕語ってしまう」（DG, 226）のである。

このようなデリダの方針は「明言（déclaration）」と「記述（description）」の区分によって示されている。『言語起源論』読解の至るところでデリダが執拗に示していることだが、ルソーはその公的見解（déclaration）においては、絶えずエクリチュールの存在を否認し、その地位を落とすことを欲望し「明言」するのだが、一方で密かにそのエクリチュールの必然性と必要とを「記述」してしまう。例えばルソーはエクリチュールをパロールの単なる代補として軽視するが（明言）、一方で、ある時には書く行為、身振りの言語、ヒエログリフを声よりもいっそう「表現的」なものとして称揚する（記述）。

デリダによれば、このような矛盾は、それを統率し規制する現前性・直接性という指標によって隠蔽されている（したがってデリダはこれを「規制された〔réglée〕矛盾」と呼ぶ）。デリダはこの点をルソーの用いる「表現的〔expressif〕」という形容詞についての考察において明確にしている。デリダの指摘によれば、記号は（それがいかなる記号であれ）ルソーにとって、それが直接性との関係の中で考察される場合には「自由の記号」であるが、一方でこれが媒介として理解され、「障害」とみなされる場合には、「隷属状態を表示」する[7]。「このとき〔記号が媒介であるとき〕、記号から記号への、表象から表象への循環と無限の送り返しを介して、現前の固有なものは場を持たない。ここでは、個人は個人として存在せず、自己としても存在しない。ひとはもはや意味を意のままにすることはできないし、それを停止させることもできない」（DG, 332）。

ルソーにおいては、表現される内部の固有性が媒体を通じて透明に現前する場合に記号は自由の証として賞賛され、そうでない場合には固有性の消失、匿名性の契機として忌避される（欲望は、この固有性の消失の結果として生じる[8]）。したがって、ルソーが「明言」しているのは実際にはパロールやエクリチュールの性質ではない。ルソーが気にかけているのは現前との距離、近接性であり、「表現的」という形容詞は、内的起源（とみなされるもの）との距離を測定し、統御し、「自由」を保全するための一個の隠語（ジャーゴン）なのである。

デリダの読解が発見するのは、現前を求める欲望の「矛盾しているが首尾一貫した運動」が、その「記述」の働きにおいてみずから裏切られていること、言い換えれば、代補を記述するルソーのテクストそれ自体がすでに「危険な代補」の運動に取り込まれている事態である。「ルソー」はエクリチュールの理論を完成することはなかったが、「ルソーのエクリチュール」はエクリチュールについて（「悪」や「脅威」という仕方ではあれ）雄弁に語ってしまう。ルソーの言説は、代補の運動によって「入れ子状に」（DG, 233）構成されており、ルソーは自身が書き込んだエクリチュールの理論そのものによって不意打ち（surprise）される。

４． 範例と思想史——ルソーの夢の位置

このように「欲望」に着目して読解するデリダの方針は、精神分析に接近している。実際、デリダがルソーのテクストを一個の「夢」と形容するときには、夢を抑圧された欲望の成就としてみなすフロイトの理論が念頭に置かれているし[9]、クリストファー・ノリスによれば、『グラマトロジー』第二部の読解は欲望を「言語の内部で永続的に作動する差異の運動」[10]として捉える点において精神分析と近似する。

しかし、デリダはこの近似を認めつつも、自身の読解を精神分析と区別している。この差異は、次の二点にまとめることができるだろう。

（１）前節で見たようにデリダにとって、テクストは現実のルソーの「内面」（思考であれ、欲望であれ）を単に表現したものではない。したがってその欲望の運動はあくまでテクストの内部から理解されるのであり、デリダは「テクストの外部」としての作家の現実的生を持ち出したり、その病理を「診断」することはできない。

（２）デリダによれば、精神分析はルソーの欲望が持つ固有の運動を確かに暴くことができるが、ルソーのテクストにおける「すでにそこに〔déjà-là〕」（DG, 230）、つまりルソーが思考を開始し著作を書き始める際にすでに置かれていた状況を明らかにすることはできない。デリダにとってルソーのテクストに現れる直接性への欲望は、スタロバンスキーを含めた多くの解釈者たちの見立てと異なり、「ジャン＝ジャック・ルソー」と名づけられたある特定の主体の「欲望」を超えた歴史性のうちに読まれ、位置づけられるべきなのである。この前提から出発するデリダは、精神分析的読解それ自体の歴史性をも問題としている。

このような精神分析との距離は、しかし、精神分析の拒否というわけではない。デリダはむしろ、精神分析的読解の「思想史」への拡張を試みている。以下の箇所でデリダはフロイトを援用しつつ、自身の企図を次のように要約している。

> しかし、こうした移動と変形〔ルソーによる代補という語の運用を指す〕は、ひとつの欲望の矛盾的な——あるいはそれ自身代補的な——統一性によって規整されている。フロイトが分析している夢の中でのように、両立不可能なものはある欲望の成就

が問題となるや否や、同一律や排中律、つまり意識の論理的時間にもかかわらず、直ちに認められる。夢とは別の言葉を用いることで、またもはや現前や意識の形而上学のそれではない概念性をはじめて用いることによって（フロイトの言説の内部では、未だ、夢と覚醒とを対立させている）、そこにおいてはこの規制された「矛盾」が可能であった、そして記述可能であったような空間を定義しなければならない。「思想史〔histoire des idées〕」と呼ばれるものは、自身の領域を他の領域上に分節化する前に、この空間をとりだすことから始まるのでなくてはならない。もちろん、私たちが唯一提起しうる問題はここにある。（DG, 348-349）

デリダにおいてルソーの現前への欲望は、すでに歴史的な欲望であり、その矛盾した運動はある「空間」に条件づけられている。「欲望」が破壊不可能なのは、この条件としての「空間」——形而上学の「閉域」——の破壊不可能性に由来する。こうした歴史的欲望の破壊不可能性は、デリダにおいて、ルソーという一人の思想家を超えた広がりを持っている。実際デリダは同時期の別の論考で、アントナン・アルトーを読解する際に（アルトーはデリダにとって西洋形而上学の伝統に対するもっともラディカルな破壊者のひとりでもあった）、アルトーにルソーと同様の「満ち足りた現前、非−差異への破壊不可能な欲望」（ED, 291）を見出しているし、また「限定経済から一般経済へ」では、「横滑り〔glissement〕に抗して、自己の確実性と概念の安全性をつなぎ止め〔tenir〕、保持する〔*maintenir*〕ことへのこの破壊不可能な欲望のゆえに、哲学者はバタイユのテクストに対して盲目である」（ED, 393）とし、バタイユのテクストのもつラディカルな切断の力が、この欲望のゆえに読解されてこなかったことを示唆している。かくして、ルソーに見出された破壊不可能な欲望は、哲学そのものの欲望なのである。

このようにここで問題になっているのがあくまで欲望と歴史空間の連動である以上、「ルソーは〔……〕自身の記述と明言とを一致させていない、と述べるだけでは不十分」（DG, 348）であって、テクスト上に現れる欲望の不安定な動揺や軋轢を突き止めたとしても、それは決してデリダにとって読解の完了を意味するものではない。デリダにとってルソーのテクストは「形而上学」の歴史の閉域の内部で、その歴史性において読まれないかぎりは「いかなる意味も持た」ず、さらにこの閉域にルソーが突き動かされているかぎりで、「厳密に言えば、作者あるいは主体がジャン＝ジャック・ルソーであるようなテクストは存在しない」（DG, 350）のである。

ここでデリダの課題は、ルソーの読解を通じて、「思想史」の開始地点——「規制された矛盾」を可能とする空間性——を描き出し、ルソーが現前に執着した（せざるをえなかった）歴史的条件、「閉域」の性格を明らかにすることである[11]。それは、「歴史的アプリオリ」（ある時代の認識を可能にする超越論的条件）を記述しようとしたミシェル・フーコー『言葉と物』（1966）の取り組みにむしろ近似する（実際、先に引用した箇所の直前で、デリダはフーコーと自身の企図を比較する——それどころか、「代補の論理」こそがフーコーの議論に

先行している——かのような文言を仄めかしている[12]。ルソーのテクストはここで、「破壊不可能な欲望」の条件としての閉域を描き出すための「範例」として導入されるのである。

ただし、デリダはこの「範例」という概念についてもまた、『グラマトロジー』ではその冒頭から留保を加えつつ独特の複雑化を行っており（DG, 7）、素朴に受け入れるべきものではない。すでに見たようにルソーのテクストは純粋に特殊なものではないが、かといって、ある時代、あるイデオロギー、ある思想を「表現」する単なる具体例の地位に堕すわけでもない。これまでにも検討されてきた通り[13]、デリダが用いる「範例」、「範例性」という概念は、普遍性（universalité）と特異性（singularité）の極端な逆説を示している。デリダの議論においては、特異な一回性の出来事であるテクストは、しかし同時に、ある種の一般性、普遍性（歴史性）を獲得せざるをえないものとして、その両義性が強調されつつ読まれるのだ。

５．『グラマトロジーについて』の生成と構造

結局のところ『グラマトロジー』第二部の企図は、ルソーの「夢」（テクスト）の還元不可能な特異性と、その欲望の矛盾的な統一性を可能とする「夢」の空間（歴史）、この両者の緊張を分析し明らかにすることであった。しかし、最後に問われねばならないのは、それではデリダはなぜ範例としてルソーを選んだのか、という問いである。ルソーという範例は『グラマトロジー』において特権的なものであり——デリダはこの特権性を自覚しており、ルソーという範例については「いっそうの粘り強さと鈍重さをもって取り組むことで、その選択を正当化し、必然性を証明しなければならなかった」（DG, 7）と序文で振り返っている——、デリダは十七世紀・十八世紀の思潮を「ルソーの時代」という一種の換喩で示し、そこにロゴス中心主義の歴史の転換点を発見するにまで至っている。

この正当化の根拠は、もっとも単純な理由としては「形而上学のこの時代の内部で、デカルトとヘーゲルのあいだで、おそらくルソーはエクリチュールの還元を主題化し体系化した唯一あるいは最初の者である」（DG, 147）という判断に由来する。しかし、さらに詳しい事情は、『グラマトロジー』第二部第四章でウォーバートン、コンディヤック、ルソーの三者を比較する際に明確化されているように思われる。

デリダはウォーバートンやコンディヤックの神学的な「言語起源論」に比べた場合のルソーの特異性は、次のラディカルな二重性にある（DG, 406-407）。「一方で」ルソーは発生論的なモデルを採用することで、言語の起源に関する直線的・因果関係的な説明を廃棄し、「社会的・経済的な諸システムとの、そして情念の諸形象との関係におけるエクリチュールの体系の諸構造」を記述する。ここでルソーは、ウォーバートンとコンディヤックの議論がもっていた神学的先入見から遠ざかる。しかし、「他方で、ルソーはウォーバートンとコンディヤックの体系においては還元不可能に経済的なものとして告知されていたものを無力化＝中性化する。私たちは、ルソーの言説のうちで神学的理性の狡知がいかに生じているのかを知るのだ」。

この後者の点についてデリダは非常に細密な議論を展開しており、ここで詳細な検討はできないが、必要最低限の点だけ押さえておこう。この箇所でデリダは、ウォーバートンとコンディヤックがエクリチュールを事物を表象する際の経済的合理性によって特徴づけていたことに着目している。絵画、象形文字、アルファベットの順に、記号は事物を理念化し、より省略的に表示することが可能になり、また科学に適したものとなる。デリダはこの見立て自体が起源として事物の知覚（現前）を前提していることに留保を加えつつも（とりわけコンディヤックの経験論的・感覚論的傾向が批判される）、この省略の運動、「散文化」、エコノミーこそがエピステーメーの条件であり、同時に「起源からの疎隔」（DG, 404）として必然的でもあることを強調する。

一方、ルソーは言語、社会、エクリチュールの状態をそれぞれ三つの時期に区分することで構造的に分析しており、まずデリダはこの区分の恣意性を批判的に検討し、ルソーの記述においてこの時期区分をめぐる議論が錯綜していることを指摘する（DG, 414-415）。ここからデリダは、ルソーがエクリチュールの発生を経験的偶然性あるいは派生的で有害な代補として相対化しており、「その歴史的出現にいかなる必然性も与えていない」（DG, 416）点を問題視する。

この後者の論点において、デリダがエクリチュールの必然性を否認する伝統形而上学の身振りを発見していることは言うまでもないが、むしろ重要なのは、ここでデリダが「一方で／他方で（d’un côté...d’un autre côté…）」というイディオムを強調していることである。ルソーのテクストそれ自体が明言／記述の分裂から読まれたのとパラレルな仕方で、ここでデリダは極端に二重の読解を展開している。デリダの読解は、一方でルソーのテクストがもつ閉域に対する「切断の価値」（DG, 407）を、他方でその「反作用」（DG, 147）としての、閉域の強固な閉じ込めの力（「神学的理性の狡知」）を測定しようと試みている。デカルトからヘーゲルに至る思惟の伝統において、ルソーのテクストが範例としての例外的なほどの特異性を持つのは、まさにこの二重性においてなのである。

こうした両義性は、次のような言明では反転させられた形で——つまり閉域の脱構築というプロジェクトに対するルソーの貢献を認めるかたちで——述べられている。「ルソーは死の生に対する、悪の善に対する、表象＝再現前の現前に対する、仮面の顔に対する、エクリチュールのパロールに対する外部性を夢見た」が、それに反して、「ルソーの夢は形而上学のなかに代補の力を導入させるところに存している」（DG, 444）。つまり、ルソーはその欲望において、エクリチュールをパロールに対して単に派生的なものと見る「現前の形而上学」の歴史に従属するが、一方でそのテクストは、代補の運動を記述し、内側からその欲望に密かに抵抗することで、その脱出の契機を提供しもするのである。

このように、デリダの読解がルソーの「夢」と「歴史」のあいだに働く、脱出と囲い込みの力学を暴くものであったことはもはや明白である。ここでさらに複雑なのは、『グラマトロジー』が分析するその歴史の性格そのものがどこから調達されたのか、という最後の問題だろう。デリダはこの「形而上学の閉域」という論点を独断的に密輸入し、ルソーに押し付

けているのだろうか。このような疑問は避けられないものではあるが、本稿では別の可能性を示してみたい。むしろデリダは、『グラマトロジー』において「閉域」の分析に着手するための一個の基準点・参照軸として「ルソーの時代」を置いているのではないか。

それはすでに指摘したように、ソシュールとレヴィ＝ストロースの読解において顕著である。とりわけ第一部第二章で、デリダはソシュールの議論に潜む古典的な先入見を暴露するために、ルソーとソシュールの自然概念の近似を執拗に指摘している（Cf. DG, 54）。『グラマトロジー』でデリダはルソーを歴史的に読むだけではなく、「閉域」の系譜を編み、その批判を開始するために、ルソーという「範例」を絶え間なく参照している。

デリダは単に歴史から出発してルソーを読み、その欲望を歴史的欲望として規定しただけではなく、ルソーの「夢判断」を通じてこそ、現前の形而上学の歴史を一個の「夢」として形容し、その分析に、さらにはその脱構築に着手しえた。この見立てが正しければ、結論として、『グラマトロジー』という書物にはふたつの出発点が存在している、というべきである。つまり、一方でロゴス中心主義の歴史の「閉域」であり、他方でルソーという特異な「範例」である。この両者は、『グラマトロジー』において、二重かつ同時の出発点として採用されており、互いが互いへと差し向け合う独特の循環をなしている。『グラマトロジー』の構成はこのように理解されねばならず、一方を捨象して理解しうるものではない。

「ルソー」という固有名はデリダにとって、形而上学の脱構築に着手するために通過しなければならない、不可避で有益な参照点のひとつであった。このことは、『グラマトロジー』第二部の末尾を一瞥すれば明瞭に理解できよう。デリダは『エミール』の夢と哲学に関する一節を引用し、この書物を終えている。ルソーはいう。「人々はある不愉快な夜の夢を哲学と称していかめしく差し出す。人々は私も同じく夢を見ているのだ、と言うだろう。それは認めよう。だが、他の人はその点に気を払わないが、私は自身の夢を夢として差し出す。それが目覚めた人々にとって有益な何かであるかどうかは、読者の探求に委ねておこう」（OC, IV, 350-351）。

おわりに

本稿では、デリダが『グラマトロジー』において「範例」として捉えたルソーの位置をめぐって議論した。本稿ではとりわけ「欲望」の観点に着目し、先行する批評からの影響を指摘しながら、デリダの読解がスタロバンスキーからも精神分析からも差別化される地点としての歴史性の問題圏を指摘した。ルソーの「夢」がデリダの議論に対して持つ意義はさしあたり次のように総括できる。（１）「現前の形而上学」の典型的特質を示す範例。しかし同時に、（２）当の「現前の形而上学」の欲望を分析するための適切な出発点。（３）この「閉域」の外部の可能性――「代補」の必然性――を「記述」において示す特異点。デリダのいう「代補」は、その独特の脱構築的読解のうちで、デリダがルソーから遺産継承した「古名（paléonymie）」であった。

今後より詳細に検討されねばならない点は、デリダが「ルソーの時代」に見出した特異性の詳細（とりわけデカルト、ウォーバートン、コンディヤックと比較した場合の詳細）、後年の「自伝」の問題系におけるルソー再読との連続性、「歴史的アプリオリ」をめぐるフーコーとの関係などである。

※本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものです。

凡例

引用中の傍点は原著者、下線は引用者の強調である。〔〕は引用者による補足・省略を示す。〈〉は、成句や語句のまとまりを示す。略号は次の著作を示し、数字はページ数を示す。

TO: Jean Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau : la transparence et l'obstacle*, Gallimard, 1971 [1957].

DG: Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Minuit, 1967.

ED: Derrida, *L'écriture et la différence,* Seuil, 1967.

ルソーからの引用は Pléiade 版を用い（OC, 巻号, ページ数）で示す。

注

[1] デリダの『言語起源論』読解そのものについての検証はなされている Cf. Christie V. McDonald, “Jacques Derrida’s Reading of Rousseau”, in *The Eighteenth Century Vol. 20*, University of Pennsylvania Press, 1979.

[2] 第一部の初出は『クリティック』誌に 1965 年から 1966 年にかけて二回に分けて掲載された論考であり、一方第二部は同時期の高等師範学校でのセミネール（全十三回）が元になっている。

[3] 「私が（私とは）他なるものとしての他者の脅威に応答することができるのは、他者を（私自身とは）他なるものへと変容させ、私の想像力、私の恐怖、私の欲望の中で他者を他者化＝変質させること〔altérant〕によってのみである」（DG, 393）。他者との出会いは、他者の現前をイマージュへと置き換え、それによって他者を「（自己にとっての）他者」として認めることによって生じる。『言語起源論』で登場する「巨人」の比喩をめぐってデリダが論じる想像的代補の構造については、小原琢磨「他者と恐怖—デリダのルソー読解—」（東北大学文学会編『文化 ＝Culture』80 号（3・4）2017 年、272-252 頁）が検討している。

[4] 「代補的媒介を不可避に増殖させる無限の連鎖の必然性。この媒介はまさしく自身が差延する当のものの意味を産出する。つまり、事物そのもの、直接的な現前、根源的な知覚という幻影を産出する。直接性は派生＝逸脱させられる〔dérivée〕。いっさいは中間から始まる。これが「理性にはほとんど理解し難い」ことである」（DG, 226）。

[5] この点についてデリダは、スタロバンスキーがメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』の第一部第五章「性的身体としての存在」を参照していることを強調し、注意を差し向けている（DG, 219）。

[6] デリダは『言語起源論』の執筆時期をめぐる議論の中で、ルソーにおける「憐れみの情」解釈をめぐってもスタロバンスキーと対立するが、ここでもデリダは先に見た注と同様、あるテクストを「内的な議論」（DG, 272）すなわち「ルソーの言説」の全体性に還元することによって生じる弊害を指摘している。『言語起源論』は、ルソーの死後に刊行された著作であり、現在に至るまでその正確な執筆時期が判明していない。スタロバンスキーは、『人間不平等起源論』においては、「憐れみの情」は自然状態における人間の自然かつ無反省な感情として記述されているにもかかわらず、『言語起源論』ではそれが他者と自己の比較という反省の契機を経るものとして定義されているという点に着目して、『人間不平等起源論』にこそ完成された「憐れみの情」があり、『言語起源論』はその未完成な論考であると主張した。しかしデリダは、『言語起源論』の記述を詳細に検討することで、この二つの間には共通する論理があり、「内的な」（＝内容上の）差異によってその時期を特定することはできない、と主張する。デリダは最終的にはマソンの説に同意している（Cf. DG, 243-278）。

[7] このような読解が、フッサールの「表現」概念を脱構築しようとする『声と現象』と同時期に行われていることは注目に値するだろう。さらにデリダは「竪坑とピラミッド」で同様の事態をヘーゲルにも見出している。後者の点については拙論「自由からの解放——デリダの「ヘーゲル記号論」読解における「表現」概念の脱構築」（日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』26 号、2021 年、275-286 頁）を参照。

[8] 「パロールが記号作用〔……〕の深淵を開くとき、始源学的契機への回帰、パロールなき記号の最初の瞬間への回帰が魅惑的なものとなる」（DG, 332-333）。

[9] ただしデリダは「夢」という比喩形象に一貫して着目しており、この点については単に精神分析的なものとは言い切れない。以下の書評で部分的に論じられている。郷原佳以「哲学的言説の隘路 ： 亀井大輔『デリダ 歴史の思考』について」（『立命館大学人文科学研究所紀要』120 号、2019 年、129-150 頁）。

[10] Christopher Norris, *Derrida*, Harvard University Press, 1987, p.114. ただしここで比較対象になっているのはラカンである。

[11] ポール・ド・マンは『盲目と洞察』で、デリダのテクストが一種の「ドラマ」であり、それが「形而上学を西洋思想の一時代とみなすハイデガーとニーチェのフィクション」によって支えられているとし、その歴史主義的傾向を批判している。この批判の是非はともかく、少なくともデリダの文言から理解できるのは、デリダがむしろこの「フィクション」の詳細な検討こそを自身の課題として受け止めていることである。両者はその課題認識においてそもそも異なる方向性を示している。Paul de Man, *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*, Oxford University Press, 1983[1971], p.137.

[12] 「いまや私たちは、ここで問題なのが言葉でも物でもない、ということを知っている。言葉と物〔Le mot et la chose〕は、ただ代補的構造だけが産出し、標記しうる、指示の境界〔des limites référentielles〕である」(DG, 348)。さらにより後ろの箇所で、「まさにこの代補性が、のちに、言葉と物〔les mots et les choses〕の差異についての言説に場を与える」(DG, 375)。歴史をめぐるフーコーとデリダの相違を扱った文献としては亀井大輔『デリダ　歴史の思考』(法政大学出版局、2019 年)がある。ただし亀井が扱うのは「コギトと狂気の歴史」のみであり、その比較は『狂気の歴史』をめぐるフーコー–デリダ論争に限られている。

[13] ルソーに関しては、以下を参照。Irene E. Harvey, “Doubling the Space of Existence: Exemplarity in Derrida—the Case of Rousseau,” in John Sallis(ed.), *Deconstruction and Philosophy, The Texts of Jacques Derrida,* University of Chicago Press, 1987, pp.60-70. このハーヴェイの論考にも言及しつつ、デリダの「範例」概念についてのより概括的な検討を行ったものとして、青柳悦子『デリダで読む『千夜一夜』　文学と範例性』新曜社、2009 年がある。